

## 岩手県沿岸海域における津波被害状況調査概要 3-唐丹湾-

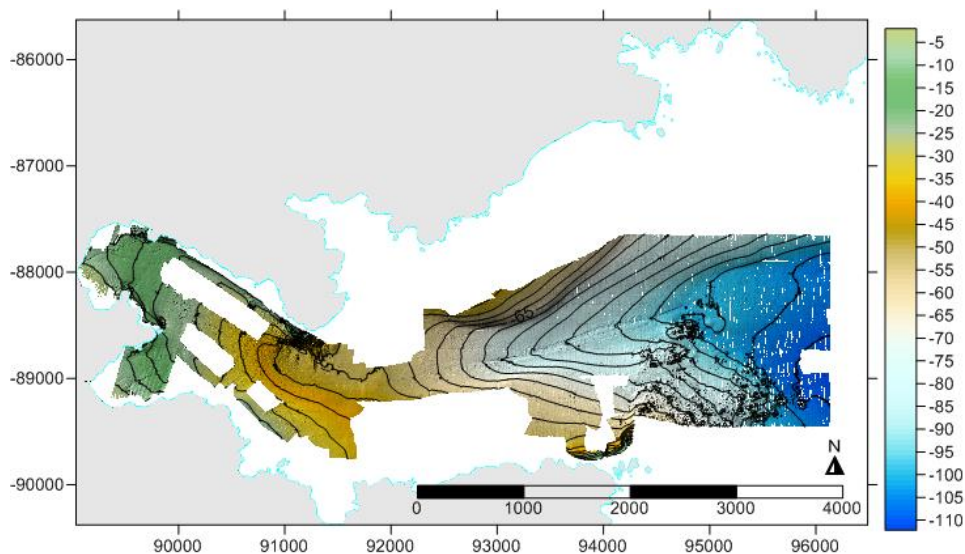
○八木雅俊・坂本泉・横山由香・滝野義幸・鈴木彩加・金井大輔・井村理一郎（東海大学海洋学部），  
吉河秀郎（海洋研究開発機構）・鬼頭毅・松井康雄（芙蓉海洋開発(株)）

リアス式海岸で知られる岩手県では、過去の大津波の経験から防潮堤をはじめ防災施設の整備を行ってきた。しかし、2011年の東北地方太平洋沖地震による津波では、高さ10mを超す大津波が沿岸各地に押し寄せ、唐丹湾北西部小白浜では設置されていた高さ約12mの防潮堤が津波により転倒し、背後の集落が押し流されている。今回の調査では、この津波による被害の概要およびその特徴について海底地形地質調査を実施した。

海底地形データ取得には、R2Sonic社 sonic2024、海底のイメージマッピングにKLEIN社 SYSTEM3000、高分解能地層探査には、Innomar社 SES2000をそれぞれ使用した。また、これらの音波探査記録で取得した特異点をROVにより直接観察するとともに、柱状採泥器やグラブ式採泥器によるサンプリングを実施した。

海底地形調査により水深2~112mまでの海底地形データを得ることができた。湾奥部の水深5~25m付近は平坦な地形を呈しており、その海底にはいくつか凹凸がみられ、この凹凸はイメージマッピングでは人工物と思われる反応を示し、ROV観察から防波堤の一部であることが確認された。また、水深25~45mにかけて海底面は緩やかに傾斜していくが、水深50m付近で再び平坦となり、湾口にかけて徐々に傾斜を増していく。水深70m付近より90mまでは谷軸にほぼ平行な狭い谷が発達しているのが確認された。これと同様な谷は越喜来湾においてもほぼ同水深において確認された。高分解能地層探査から、水深17~20m付近の海底では凹凸で特徴づけられた波状地形が分布し、これは、引き波により海水面が低下し陸化したと推定される。また、ガレキと思われる反応が7~11m、18m付近でそれぞれ集中して確認された。

採泥では19点の表層堆積物を採取した。表層堆積物は一部礫を含むことがあったが、全体として細粒なものが多く、貝殻片なども含んでいた。この貝殻片は水深70m付近でも確認された。



音響測深記録から作成した唐丹湾の海底地形図